

『賃労働と資本』を学ぶ  
第4回 四国ブロック

商品の価格は何によって決定されるか？

司会 Ⅱ前回までの1章の学習・討論で

「賃賃は労働力という一定の商品の価格である」ことの理解が深まったと思います。そこでこの2章「商品の価格は何によって決定されるか？」で、もう一段階踏み込んでいきます。今回は高知県協Iさんのレポートのみとなりますが、Iさんよろしくお願いします。

商品の価格を決定する競争

I Ⅱ商品の価格を決定する競争は、①売手たちの間の競争②買手たちの間の競争③売手たちと買手たちの間の競争

この三つのことを言い、二面的とテキストのなかでは説明されています。一つずつ見ていきましょう。

①売手たちの間の競争

同じ品質の商品を複数の売手が供給することを前提とした場合、一番安く売る者の商品が売れるのは明らかです。そのことによって他の売手を押しつけて自身の最大の販路を確保することができます。独り占めして多く売るために競争がおきるのです。売手たちとの競争は商品の価格を下落させることとなります。

②買手たちの間の競争

買手たちに競争が生じた場合は、売り手たちの場合とは逆に、商品を求めて商品の価格は騰貴することになります。

③買手たちと売手たちとの間の競争

買手たちはできるだけ安く商品を買おうとし、売手たちはできるだけ高く商品売ろうとします。この競争の結果は、売手たちの間の競争と、買手たちの間の競争で、どちらが強いかによって決まります。本文では軍隊で例えています。売手と買手それぞれ自身との競争が少ない方が、相手に対して勝利するのです。



売り手間の競争で商品価格は下がる

これまでのことを綿花の売買を例にとつて次のように説明しています。  
市場にある1000梱の綿花をめぐり、買手が1000梱の綿花を求めている場合

【買手側】

▼需要は供給の10倍となり、買手たちの間の競争は激しくなる。

▼商業の歴史上でも、綿花の凶作期にはいくつかの資本家が手を結び、世界中の綿花を買い占めようとしたように、買手もできれば全部手に入れたいと願う。

▼そこである買手は綿花に比較的高い値段をつけ、他の買手を駆逐する。

【売手側】

▽一方売手たちは買手たちのその競争を見て、全ての綿花が売れることを確信。

▽売手たちの間で抜け駆けして価格を下げて売る者が出ないように見張る。

▽売手間で結束して高い値段で全ての綿花を売り抜ける。

▽買手の付ける値段の上限がなければ売手の要求は際限がない。

商品の供給が、その商品の需要よりも少なければ、売手たちの間には、ほ

とんど競争が行われません。この競争が減少すればするほど、買手たちの競争が増大し、その結果として、多かれ少なかれ商品価格は騰貴することになります。

またこれと逆の場合も頻繁に生じ、需要を超える供給の著しい商品の過剰の場合は、買手がいないため、二束三文での投げ売りとなり、商品価格は下落することになります。

需要と供給の関係の変化にしたがつて価格が上がったり、下がったりを繰り返していくのです。

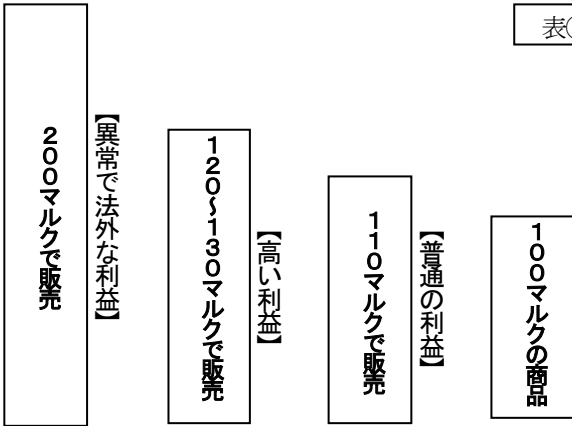
価格の騰落・高低及び需要

・供給とは何か

では、「価格の騰貴、下落とは何を意味し、高い価格、安い価格とは何を意味するか？ また、価格は需要と供給の関係によって決定されるとすれば、需要と供給の関係は何によって決定さ

# ◆特集 みんなの学習講座

表①



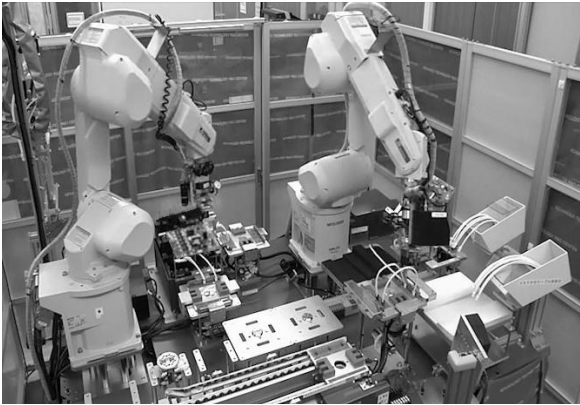
れるか？」が次の問題になります。  
 ここでマルクスは次のような例を出して説明しています。  
 ※ブルジョアの回答は、商品生産に100マルクをかけ、その商品を売る場合。

① 110マルクを得た↓普通の利益を得た  
 ② 120マルク、130マルクを得た↓高い利益を得た  
 ③ 200マルクを得た↓異常で法外な利益を得た  
 ブルジョアにとつて何がもうけの尺度（基準）なのかは、商品の生産費と異なるのです。  
 商品と商品を交換する例も紹介しています。  
 ブルジョアは、商品と商品の交換に、彼が受け取る他の商品が、自分の商品の生産費以上となるか以下となるかの程度に応じて、損得を計算するのです。  
 商品の価格とは、その商品と交換して他の商品が与えられる割合を貨幣で表したものにすぎません。そして、供給不足や需要増加のため、ある商品の価格が著しい増加をした場合、必ず他の商品の価格がそれと相対的に下がったこととなります。

このことを順を追って、絹布の例をとつて説明すると「相対的」ということが理解しやすくなると思います。  
 ① 1エレルの綿布の価格が5マルクから6マルクに上がった。  
 ② 交換する銀（貨幣）の価値は綿布に比べて下がったことになる。  
 ③ 同時に、市場にある他の商品の価格が変わらないのなら、それらの商品も綿布に比べて価格が下がったことになる。  
 ④ 前と同じ絹製品を手に入れるには、前より多い分量の商品と交換しなくてはならない。  
 ⑤ つまり、絹製品は儲かる。

儲かるところへ  
**「資本の産業間の移動」**  
 儲かる分野を見つけると資本家たちは、手をこまねいてそのまま放っておくはずがありません。次のように本を

## ◆特集 みんなの学習講座



もうかる産業へ資本は移動する（ロボット産業）

まとめました。

あるA商品の価格が上がった場合、

▼儲けを求めて多量の資本が栄えているA商品産業部門に流れ込む。

▼そのA商品産業の生産物の価格が平準化される。

▼もしくは参入が増え、過剰生産により価格が生産費以下に下落するまで続く。

逆に、あるB商品の価格が生産費以下に下がった場合、

▽資本はB商品の生産から撤退する。

▽少なからずB商品も需要があり、その産業が残る場合は、生産者が減ることとB商品の供給が減少する。

▽供給が必要と一致、または需要以下になり、価格が生産費以上に上がるまで減少していく。

資本は絶えずある産業の分野から他の産業の分野へ流れ込み、流れ出ます。移動するわけです。価格が高いと過度の流入が、価格が低いと過度の流出が起ります。供給と需要の変動は、商品の価格を絶えず繰り返して生産費まで引き戻します。商品の現実の価格は常にその生産費の上か下にありますが、騰貴と下落は相殺されるため、一定期間において産業の移動を通算すれば、

各商品はその生産費に応じて互いに交換されるのです。つまり商品の価格はその生産費によって決められるということになります。

しかし、ある経済学者は「商品の平均価格は生産費に等しいという法則はあるが、騰貴と下落で相殺される無政府的な運動は偶然である」と言い、また別の経済学者は逆に「無政府的な運動を法則として、偶発的に生産費が決まるといふ者までもいます。

しかし、この無政府的な運動があるからこそ、価格が生産費によって決められ、これこそがこの社会の秩序となっているのです。産業的無政府状態の経過を通じ、この循環運動のうちで、競争が一方の行き過ぎを他方の行き過ぎによって相殺します。すべては関連した法則であるのです。

つまり、産業間の移動や供給と需要の変動という、均衡を保つ無政府的な運動があるからこそ、この社会の秩序

## ◆特集 みんなの学習講座

が保たれているというだけで、偶然ではなく、ないと成り立たないのです。それがあってはじめて商品の価格がその生産費によって決められることにな

【商品生産に必要な労働時間8時間の場合】

機械摩損分費 原材料費 (3000円)	+	必要労働時間 (4時間) (賃金 4000円) 剰余労働時間 (4時間) (剰余価値 4000円)	=	商品価格 (11000円)
---------------------------	---	--	---	------------------

【商品生産に必要な労働時間10時間の場合】

機械摩損分費 原材料費 (3000円)	+	必要労働時間 (4時間) (賃金 4000円) 剰余労働時間 (6時間) (剰余価値 6000円)	=	商品価格 (13000円)
---------------------------	---	--	---	------------------

表②

ります。

ただし、これは「個々の産業生産物」や「個々の産業家」にはなく（小さく個別に見ていくと当てはまらないものもある）、「産業部門全体」や「産業家階級全体」という大きな枠で考えた時にのみ当てはまるのです。経済学者は、生産費と均衡を保つ無政府的な運動を切り分けて（形而上的に物事を見て）おり、それを一連の関連した法則とはみなさなかつた。われわれも同じく、個々の産業だけを見るのではなく全体を見通してその運動を理解しなくてはならないということですから。木を見て森を見ずでは理解することはできません。

### 価格は商品生産に必要な労働時間によって決定される

価格は生産費によって決定されるといふことが理解できたと思います。で

は生産費の内部を見ると「価格は商品の生産に必要な労働時間によって決定される」に等しいといえるでしょう。なぜかというとな生産費を構成するものは、①原料と機械摩損分②時間を尺度とする直接的労働であるからです。

商品一般の価格を規制する同じ一般法則は、労賃すなわち労働の価格をも規制しています。賃金も需要と供給の関係に応じて、労働力の買手である資本家と売手である労働者との間の競争によって、ときには騰貴し、ときには下落するのです。

また、①一般に商品価格が変動するのに応じて賃金も変動する。しかし内部では、労働の価格は生産費によって、つまり②労働力という商品そのものを生産するのに必要な労働時間によって決められるのです。

表③

一日の労働力の生産費 (5000円)		
衣	食	住

労働者は、一日に社会的必要労働時間（仮に5時間）分の価値（仮に5000円）を持つ必要生活手段（衣・食・住）を消費することによって労働力を生産する。

\*表②で、必要労働時間と剰余労働を図解しましたが、労賃・労働の価格は実際には他の商品のような価値通りの支払いではありません。このような意味で、労働の価格とは、労働力の（価値）によるものではありません。しかし、資本は労働を買ったと言えます。それは剰余価値＝搾取を覆い隠すためでもあります。

### 労働力の生産費とは

そこで「②労働力そのものの生産費とは何か？」ということが問題になります。

それは、労働者を労働者として維持するために、また労働者を労働者として維持

て育て上げるために必要とされる費用です。

▼労働が必要とする育成費が少ない産業は生産費も低く、それだけ労賃も低い。

▼教育をほぼ必要とせず労働者の肉体的生存だけで間に合うような産業では、彼の労働を可能とする生活維持に必要なものだけに限られる。

労賃は労働力商品の価格であり、必要生活手段の価格によって決定されるのです。ここでもうひとつ付け加えなければならぬものがあります。

それは工場主は自分の生産費を計算し、生産物の価格を計算しますが、その計算には、労働用具の消耗も勘定に入れるということです。

工場主は生産のための機械を1000マルクで導入し、10年後に新たに機械を導入する場合、10年間の生産物の価格には毎年100マルク分の機械に要する経費を加算するのです。

それと同じように、労働者の生産費にも、労働者の消耗、労働者種族の繁殖を見越した費用を加算する必要があります。簡単な労働力の生産費を総計すれば、労働者の生存（必要生活手段）と繁殖費ということになります。

この価格が労賃となるのです。こうして決定される労賃は、「労賃の最低限」と呼ばれます。

これは、生活費一般による商品の価格決定と同じように、個々の労働者個人にはなく、労働者種族に当てはまるのです。

以上が、労賃ならびに他の各商品の価格を規制する一般法則であるということです。

司会レポーターのIさん、ありがとうございました。商品の価格は何によって決定されるか？皆さんは理解できたでしょうか。次回はIさんのレポートを基にして、皆さんの討論で、より理解を深めていきたいと思います。